

■e-黒板ニュース（第28号）：「図工は楽しい授業です！」

今日は、東京都荒川区立尾久第六小学校に行きました。光村図書の国語のデジタル教科書、教育出版の社会科のe-教科書、東京書籍の社会科のデジタル掛図に続く第4弾です。教材は日本文教出版の「図工」のe-教科書です。そして、e-黒板は、一体型タイプ（プラズマ型）です。

田中士郎先生は、図工専科教諭だそうです。さすがに、専門家。子どもたちのリードはお見事でした。でも、図工の授業でなぜ、e-黒板やe-教科書が必要なのか？ どのように活用されたのかをご報告します。

今号の目次：

=====

1. 報告：東京都荒川区立尾久第六小学校の図工の授業

=====

お友達への再配信またはご紹介は、ご自由にどうぞ。会員の皆様からの投稿もお待ちしております。

宛先はいつでも ekokuban@cec.or.jp です。

e-黒板研究会のホームページ

<http://www.cec.or.jp/e2a/ekokuban>

をご参照ください。e-黒板ニュースのバックナンバー等もご覧いただけます。

1. 報告：東京都荒川区立尾久第六小学校の図工の授業

東京の王子駅から、路面電車（都電荒川線）ののって3つ目。といっても駅の間の短いので、3分で着いてしまいましたが、荒川車庫前からすぐのところに、目指す荒川区立尾久第六小学校がありました。

校長先生に挨拶をして、すぐに「図工室」に入って子どもたちを待ちました。今日は、4年生の1・2時間目の授業と、別のクラスの3・4時間目の授業の見学です。児童は、いずれも27名、まわりには図工の材料や用具がたくさん揃えられています。

○ポップアップアート

今日は、図工の授業です。黒板には、「ポップアップアート」と大きな字で書かれています。先生は「飛び出す絵本と同じように、飛び出すカードをつくりましょう」「どうしたら、飛び出すカードがつかれるのだろうか。見てみたいと思います。」と言って、黒板の向かって左手前に置かれたプラズマタイプの電子情報ボードをさわりました。

画面には、日本文教出版のe-教科書が写されています。教科書をベースにした先生用の資料集に出ている作品やその作り方などがビデオで解説されている教材です。

○創作意欲

「まずは、よく見てね」と、飛び出すカードの実例を動画で何種類か見せます。二つ折にしたカードを開くと、中から立体が飛び出します。動物だったり、家や、山や、クリスマスツリーやサンタクロースなどです。

「すごい！」「ワ～、いいな～」「作ってみたい！」とさまざまな声が聞こえました。

「みんなでいっしょに作ってみましょう」電子情報ボードで、作り方を見ながらみんなで二つ折りにした紙にハサミで切り込みを入れていきます。「おためし」だから、失敗してもいいんだよ。

「わからなかったら、ここに来て」「自分で勝手に（電子情報ボードを）さわって見てもいいですよ」「これ、パソコンですから」「作品がいろいろあるから見てください」そして、いろいろな作品を見せながら「感心して、言葉もないですか？」と先生。

始まった。もう、4人の子どもたちが前に来て、画面をペンで触っている。「ホラホラ」といろいろ触りまくっている。

「来週、お母さんの誕生日なんだ」という声が聞こえた。あの子はお母さんへの誕生日プレゼントを作るのかな～。

実は、私も電子情報ボードに表示される「飛び出すカード」を見て、いつもは紙粘土でつくっているアニメのキャラクターを作りたいと、強く思ったのでした。

○二つのクラス

今日は、1・2時間目が4年1組。3・4時間目が4年2組。人数も、教材も、先生もまったく同じ。だけど、雰囲気や作品はとても違う。最初のクラスはおとなしい。ざわめきも少ないけれど発言もすくない。次のクラスは活発。いろいろと意見を言い合う。まったく自分だけの世界で、思い思いの作品を作っていたり、グループ全員が同じようなテーマ（クリスマスカード）を作っていたりとか。

前のクラスの後半で、私は、独自の世界に入っていました。アニメのキャラクターをどのように配置しようか。飛び出したとき、どのようにしようか。などなど、授業見学というより授業参加の状態でした。結局、次のクラスの前半でも先生の話を、子どもたちの様子を気にすることせず、飛び出すカードをつくり続けていました。

なんとなくできあがった時、一人の子が、「それもらってもいい？」「いいよ」と

いうわけで、私の作品はもらわれていきました。

○先生が話をする時は

田中先生は、ちょっと厳しい先生です。授業の始めや終わりに先生が説明をする時は、子どもたちは絶対に何もしないで、先生の方を向く必要があります。一人でも、話をしていたり、手を動かして何かを作っていたりしていると、先生は話を始めません。

子どもたちは、特別ピリピリした風はありませんが、話をしている子も、よそ見をしている子も、作業を続けている子も、「まわりの雰囲気をさとって」、動きを止め、静かに先生の方をみるようになります。結構時間がかかりますが、田中先生はじっとまっています。大切な様ですが、今までこれだけ徹底しているクラスを見たことはありません。田中先生の授業力でしょう。

○工作室にe-黒板は必要？

授業が終わって、ふと考えました。「はたして、あの工作室にe-黒板は必要だったのだろうか？」と。e-黒板がなくても、田中先生は上手く授業をやっただろうし、子どもたちも何も困らなかったのではなかったか？

工作名人の田中先生と、紙とハサミとのりとペンがあれば、工作の授業はできます。先生は、e-黒板を、先生が教えるときの「教材提示」と、子どもたちが知りたいことを検索したり、見たりする「調べ学習」の道具として使っておられたように思いました。

そうそう、プラズマ型の電子情報ボードは絵画等の芸術作品の鑑賞用としても使えそうだと言われています。そのときには「縦横比」が課題だとも聞いていました。授業終了後に田中先生に、e-教科書の鑑賞教材を写して見せていただき、課題の原因や対処法も知ることができました。

デジタル放送でどんどん教育用番組やコンテンツが放送されるようになれば、このタイプの電子情報ボードの利用価値がさらに高まることでしょう。そのこともなんとなく実感できました。

ちょっと、時間がたって思ったのです。私も子どもたちと一緒に、「作ってみたい！」と強く感じたのは、電子情報ボードに写し出された作品を見たときでした。子どもたちに、「すごい！」「ワ～、いいな～」「作ってみたい！」そして、「来週、お母さんの誕生日なんだ」と言わせて創作意欲をかき立てたことが、一番の活用効果だったのかもしれないですね。田中先生。

ヒヨコのアップリケがついた工作用のエプロン姿の田中先生は、最後にこう言われました。「図工は楽しい授業です！」と。

以上

=====
編集・発行：財団法人コンピュータ教育開発センター 関 幸一
e-黒板ニュース メールアドレス： ekokuban@cec.or.jp
e-黒板研究会 ホームページ： <http://www.cec.or.jp/e2a/ekokuban/>
=====